

氏名	丹下 聡子		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第5号		
学位授与年月日	平成26年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者		
題目	学位論文題目 アルテスのフルート教本再考 —— 導音の奏法に見る19世紀の美意識 ——		
学位論文等 審査委員	(演奏審査)	主査教授	村田 四郎
		副査教授	井上 さつき
		副査教授	大下 久見子
		副査教授	熊谷 恵美子
	(論文審査 及び最終 試験)	主査教授	村田 四郎
		副査教授	大下 久見子
		副査教授	井上 さつき
		外部 審査員 教授	佐伯 隆夫 (武蔵野音楽大学教授)

学位論文の要旨

アンリ・アルテス Henry Altès (1826 - 1895) は、19世紀フランスで活躍したフルート奏者・作曲家で、25年間パリ音楽院教授を務めた。1880年に出版された、彼の『音楽の完全な理論を含むベーム・システム・フルートのための教本（全3巻）』は、現在、一般に使用されている円筒管ベーム式フルート（テオバルト・ベームが開発したキーシステムによるフルート）のために書かれている。パリ音楽院教授のなかで、この楽器を対象とする教本を書いたのは、アルテスが初めてであった。

彼の教本は、各国語に翻訳され、現在も使われている。たとえば1960年に出版された日本語版（比田井による編集、翻訳）は初の邦訳フルート教本であり、その他の著者による翻訳書も多数出版されている。それらは、現在に至るまで初心者向けの教本として広く活用されている。しかしながら、これまで、この教本の著者であるアルテスに注目した研究は、ほとんど行われてこなかった。アルテスがどのような奏法を用いていたのか、そしてその奏法が、彼の教本にどのように取り入れられていたのかについては明らかにされていない。

本論の目的は、アルテスの教本を精査して彼の奏法を考察し、この教本を再考することである。アルテスは、フルートという楽器が円錐管から円筒管ベーム式に変わっていく過渡期にフルート奏者として活躍していた。そのため、アルテス自身が、楽器の変遷とともに変化する美的価値や演奏様式の影響を直接受けたと考えられ、このような時代背景が、彼の教本の中に反映されていると推測される。

本論では、奏法の変遷を考察するために、アルテスの前後を含むパリ音楽院フルート科の歴代教授によって書かれたフルート教本を取り上げた。研究対象は、初代教授のフラン

ソワ・ドゥヴィエンヌ François Devienne (1759 - 1803) 、からアルテスの後を継いだポール・タファネル Paul Taffanel (1844 - 1908) までの教本、全7冊である。

第1章では、それぞれの教本が対象としている楽器について概観した後に、それらの教本に書かれている練習項目の変遷を追い、アルテスの教本の特徴を浮き彫りにした。ここで注目したのは、導音のための指使いと、運指を易しくするための指使いという二つの項目である。導音のための指使いは、導音を演奏するために音程を高めにするためのものであり、その項目は、アルテスとそれ以前の教授の教本に設けられていたが、タファネルの教本にはなかった。また、運指を易しくするための指使いは、楽器の改良が進むにつれて複雑になっていた導音のための指使いを易しくすることと、トリルやトレモロなど、通常の指使いでは技術的に難しい運指を易しくすることを目的としたものだが、アルテスの教本だけに書かれていた。したがって、円筒管ベーム式フルートのための教本で、この二つの項目を設けているのは、アルテスだけであることがわかった。

第2章ではまず、19世紀に評価された演奏を窺い知るために、当時の記録を参照した。また、導音のための指使いの必要性を把握するため、1839年にパリ音楽院で開かれた、ベーム式フルートを採用するかどうかを決めるための公式審査の記録を参照し、当時の導音の演奏法を概観した。その後、アルテスが教本の中でどのように導音の指使いを扱っているのかを調べ、アルテス以前の教本に書かれているものとの類似点と相違点を考察した。その結果、類似点は、二つの主音の間に挟まれた導音でその指使いを使用することであり、相違点は、アルテス以前の教本では異名同音で異なる指使いを提示しているのに対して、アルテスは異名同音についても同じ指使いを提示していたことであった。アルテス自身は、この項目で提示していない指使いも用いていたようだが、運指の複雑化を避けるためにここでは提示していない。また、アルテスはその音の違いは、高度な技術を持ったプロの演奏家でなければ聴き分けられないと考えていたことも、それを提示していない理由であった。しかしながら彼は、均一な響きを出すことができる円筒管ベーム式フルートで、敢えてその指使いを用いていたと考えられ、この項目を設けることで、それまでの伝統を引き継いでいたのではないかと推察できる。

第3章では、アルテス自身の演奏法を考察するために、彼の編曲作品であるベートーヴェンのヴァイオリンソナタ第5番《春》の第1楽章と、アルテスが作曲したパリ音楽院の卒業試験曲である《ソロ》第7番を研究対象とした。前者は、ベーム式フルート以前の楽器が演奏されていた時期に書かれた作品であり、後者は、円筒管ベーム式フルートで演奏するために書かれた作品である。両者から、導音のための指使いを用いる可能性のある部分を取り上げることで、彼が持っていた美意識を考察した。どちらの作品でも、導音の指使いを用いることで、ベーム式以前の楽器が持つ美意識を持った旋律を作り出すことができる上に、アーティキュレーションやクレシェンド、ディミヌエンドなどが効果的に演奏できる部分を見出すことができた。

以上の考察から、アルテスの教本には過去から受け継いで来た美学が引き継がれていることがわかった。この教本は、その美学を前提として円筒管ベーム式フルートを演奏することを目指して書かれたのである。アルテスが初めて手にした楽器は、円錐管の多鍵式フルートであった。この楽器での演奏が彼の美意識の根源となっていたと考えられる。その

ため、円筒管ベーム式フルートに代えた後も、彼の美意識を持って演奏するために導音の指使いを使っていたのだろう。

アルテスの奏法は、現代の奏者にとって有益である。具体的には、導音のための指使いを用いることで、円筒管ベーム式フルート以前の楽器のために書かれた作品の解釈、たとえば、アーティキュレーションなどのフレージングを考察することに役立つ。そして、その奏法での演奏は、アルテスがフルート奏者として活躍していた時代の演奏様式を再現できる可能性がある。したがって、アルテスのフルート教本は、現代のフルート奏者が 19 世紀の演奏様式を学ぶために有用であり、楽器が変遷して行く過渡期に存在していたアルテスの貢献は、再評価されるべきであるという結論が導かれた。

演奏審査結果の要旨

申請者の研究は、フルートという楽器のシステムに次々と改良が加えられるという、いわば激動の時代に活躍した H. アルテスが、新しいシステムの楽器のために導音のための替え指や、速いパッセージに対応する替え指等を提唱していたことに着目し、演奏様式や音楽美の変遷を具体的に探るもので、これまでのフルート関連の研究者が目を向けることがなかった画期的なものである。

今回の申請リサイタルは、その研究内容に沿ってフルートのために書かれた作品を時代とともに追い、まさに楽器の機能の変遷と音楽美の変遷を示す大変意欲的なプログラミングであった。特に、楽曲としては短いものの、アルテスが書き残した《ナイチンゲール No. 1》では提唱された替え指を忠実に実践し、それらが音色の変化や微妙な表現に係る意義を明確に示すものであった。また、会場のロビーにはその作品の楽譜を展示し、それは聴衆を意識した粋な計らいであった。

演奏会は随所に本人による口頭での説明を加える形で進められ、そのトークは非常にわかりやすく、研究者の学術的な意図をはっきりと聴衆に知らせることができた。全般を通して音楽性豊かで表現力に溢れた立派な演奏であった。

ただ、冒頭に演奏された J. S. バッハの《ソナタ BWV 1035》では、音量のバランスのせいか、通奏低音が十分に生かされず、本来この作品が持つ対位的な側面が表現しきれなかったのは残念であった。また、J. =L. テュルーでは、おそらくは試みたであろう替え指の効果がいまひとつ聴衆には認識されなかったこともあり、そのプログラムノートは、むしろ様式の変遷を強調して書かれるべきであったであろう。

後半で演奏された E. ヴァレーズの《比重 21.5》は、いわゆる特殊奏法が使われている作品で、3 曲目に演奏されたゴーベールのソナタとほぼ同じ頃に作曲されており、この両者をプログラムに組んだことで研究者としての問いかけの意図もはっきり示され、大変興味深いものであった。成木理香の《Six Studies》ではアルトフルートの音色、響きに加え、高度な技術を披露した。最後の平義久の作品では、各種特殊奏法の演奏技術はもとより、構成力や表現力に優れ圧巻であった。

研究テーマに沿っての意欲的なプログラミング、音楽性豊かな表現力、ユーモア溢れわかりやすいトーク、そして非常に高度な演奏技術を示した正に博士の学位にふさわしい演奏会であった。

論文審査結果の要旨

本論文は、刻々とキーシステムに改良が加えられ、フルートという楽器にとっての激動の時代に活躍し、新しいシステムの楽器のために当時の新しい音楽にも視点を置きながら伝統の演奏様式・音楽美を継承しようとした H. アルテスの功績を追うもので、これまでの研究者が目を向けてこなかった画期的な研究で、その視点と取り組みが高く評価される。

歴代のパリ音楽院フルート科教授が書き残したフルート教本を中心に使用楽器、奏法、教授法、卒業試験課題曲を年代順に精査・考察をし、いわゆるフレンチスクールの祖とされる P. タファネルが評価の対象であったのがこれまでの研究であったが、新しいシステムの楽器による伝統美の継承を試み、また当時の新しい音楽に対応する指使いの提唱などを行い、後世に多大な影響を与えたアルテスの功績を浮き彫りにした。

特に導音のための指使いについては、均質な響きを出すことができるベーム式円筒管フルートを使用しつつ、あえて音楽表現のために均一でない音も求めて音楽美の継承をしようとしたことを明らかにしたことは非常に興味深いことであり、当時のフランスの演奏様式を学ぶために有用であると結論づけている。

ただ、特にベーム式フルートについて、その開発の地であるドイツ語圏ですぐには受け入れず、フランスでいち早く受け入れられたことの背景や、平均律の概念の台頭、オーケストラ等の演奏形態の変遷など、楽器の改良・開発に至る必然性についての記述も必要であろう。そして資料とした教本等のフランス語の十分な読み込みや理解によって、より確信に満ちた論理の展開ができるようになることも、今後より研究を深めていく上で留意すべき点であろう。

しかし、本研究は演奏が音源として残っていない時代のフルートの演奏法・表現法を、教本や導音等の替え指などから考察するという画期的なもので、フルート奏者ならではの視点が随所で生かされ、非常に独創的なものであり、音楽史研究に一定の寄与を行っている。よって本論文を博士の学位に値すると判定する。

最終試験結果の要旨

この最終試験では、先ず学位申請論文と同申請リサイタルの評価について改めて確認を行った。刻々と楽器のシステムに改良が加えられるという、いわばフルートという楽器の激動の時代に活躍し、伝統の音楽様式・表現法を伝えようとし、また当時の新しい音楽にも視点を置き、後世に多大な影響を与えた H. アルテスの功績を追うという画期的なものであること改めて確認した。

そして申請リサイタルに於いては、時代と共に様式の変遷を追い、演奏会の後半には新しい音楽の表現に挑み、非常に高いレベルの表現力・技術力を披露し、聴衆に多くのメッセージを与えた素晴らしい演奏会であったことを改めて評価。また、研究者たる視点でのプログラミングが多くのことを語っていたことも特筆すべきであろう。

この課程で得た多くのノウハウを生かし、今後さらに研究を深め、また演奏家、指導者として社会に大きく貢献できる人材であることを確認して最終試験を終え、審査委員全員一致で優秀な成績と認め合格と判定した。